

Triumph onedollar ～勝  
利への放浪者～

リューヤ

アイオの森のドタバタ以降、心持に変化があったジンとその一行はさらに北の町「ジルコン」。この街はプラチナ王国で数の少ない港町の内の一つで、その中でここは大陸間移動用の大型船を走らせていつ唯一の港がある場所でもある。町の規模はラプチナ城を除けば国内最大級の繁栄を見せている街で、貿易も盛んであり外国で仕入れた珍しい品物を取り扱っている商店が多くみられる。

オニクスを手に入れた一行は、新たな宝石を求めて情報をあちこちで漁っているうちにラプチナより北に位置している大陸『シーバルー』で目的の宝石らしい話を耳にした。これを調査するためにドクターの指示を仰ぎながらこの街へ赴き、船でシーバルー大陸を目指すという計画だった。（ちなみに虎眼を除いてこれが初めての海外旅行な4人）

・・・んが、そんな最中、またトラブルが発生した。

「は、乗れない？」

大陸間移動連絡船に搭乗するには、専用の受付所であらかじめ乗船する船と部屋の予約と切符の購入が必須とされている。だがそんな事はあらかじめ知っていたのでメンバーを代表して（ジャンケンでたまたま勝っただけ）アゲートが切符を買いに行ったのだが、受付の前でいきなり素っ頓狂な声が響いた。同時に受付所付近でパンフレットを立ち読みしていた他の連中がぞろぞろと集まって受付窓口を占拠しだした。

「どういう事さお姉ちゃん！！何でオレっち達が船に乗ることができないのさ！？」

「ですから、シーバルー大陸行きの船に5人が乗るには、料金が足りないと何度も説明したじゃないですか？」

窓口でアゲートを担当した女性スタッフが、アゲートの態度とその周りを取り囲むガラの悪い4人組の圧迫感に戸惑いながら説明してくれた。

「金欠」・・・それは旅人ならば誰もが一度は通る険しい道。現在人達が所有している国王から貰った金の残金が大体5万L前後。対してシーバルー行きの船の運賃は一人頭3万L。合計金額15万L、軽く10万Lも足りないとても寂しい惨状だったのだ。

「片道だけ乗るにしても、何でそんなに金がかかるんだよ？」

「ハア、シーバルーはここラプチナと比べて治安が非常に悪い国なのです。航行途中海賊に襲われて船が沈められてしまうケースが昔は多かったので、現在はその抑止力とするためにそれ相応の契約と装備を整えた船でしか移動できない決まりになってるんです」

ヤンキー腰が入り始めているアゲートに変わって、比較的穏やかなジェットが間に入って話を聞くとそういう訳だったのか。未だに不満を持ってガンをくれ始めたアゲートをジンが制止させ、これ以上話がややこしくなる前にこの場を立ち去った方が賢明と判断し一度この受付所を離れることとした。

「放せ放すジンン！！もっかいあの係員と交渉して安くさせてやるさあ！！」

「頭を冷やせボケ、何度やったって無駄に決まってるだろ。警備だっていたんだし、下手に騒ぎを起こして前科者になりたいのか？」

「キシシシシ・・・ダメな物は仕方がない、今回は諦めようじゃないか」

「ドクターの言う通りヨ！」

「ま、しゃーねーわな」

首根っこを掴まれたまま暴れているアゲートに対し、意外と他の4人はとても潔く冷静な判断で現状を受け入れているようだった。金が無いなら仕方ない、まあ確かにそれは覆しがたい事実なのは間違いなと言え、間違いはない。

「お前ら悔しいとは思わないのさ！？たかがちょっと金が無いくらいで門前払いなんてひどいとは思わないのさ！？」

.....

アゲートは今、絶対に言うてはならないことを口に出してしまった。あえて、わざと、無理やり頭の中に氷を詰めて落ちていた4人の頭が、一瞬で煮沸して脳の血管が煮えくりかえり、プチ切れた。

「.....たかが金が無い？」

「.....言ってくれるじゃないか、バンダナ君」

「はえ？」

もう遅過ぎた。突然ジェットの本が斜め下からアゲートのアゴを猛スピードで強襲し、非常に聞きたくない鈍い音と共に5mほど吹っ飛ばされた。斧もその時に落としてしまい、息を詰まらせながら立ち上がろうとする前にジョット、ドクター、猫眼の3人にフルボッコにされた。

「自覚がねえってのは悲しいなあコラ！！アタシらの軍資金の半分はテメエの腹あ満たされるのに使われてるのにまだ気がつかねえってのか、ア”ア”！？」

「さっきから聞いていればつけ上がってくれて、一体何様のつもりなんだい！？」

「今回は今まで以上に身体に叩き込んで反省する義務があるネ！！」

無抵抗のはを杖でボコボコに殴られ、足でギタギタに蹴たぐられ、メスの先端で血が出ないギリギリの力加減でチクチクと全身を刺された。その光景ははたから見れば「路上でカツアゲをしたが相手が金を一銭も持っていなかったことに逆上してボコボコにしている不良集団」そのものだったと、離れたところで成り行きを見守るジンは後に語った。

「痛い痛い痛い痛い！！ちよっマジでやめて！！やめてってば！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

！特にドクターが一番地味に痛い！！お願い、素直に蹴って！！痛いってばさ！！」  
「キシキシキシキシキシキシ・・・・まだまだこれからが面白いところだよ？」

唯一手を加えていないジンに救いの手を求めて叫ぶが、当のジンは近くにあったベンチに座ってゴミ箱に捨てられていた今日の新聞を読みふけている真っ最中だった。

「ジ～ンちゃ～ん・・・助けてくれさあああ！！！」

「・・・あえて言ってやろう」

ジンは日本の指でタバコを挟み、煙を噴き出すと目の前に転がっているゴミに対し、言い放った。

「責任課税だと思え」

「あんまりさあああああああ！！！！！」

蜘蛛の糸が無情なほど簡単に断ち切られ、再び地獄に突き落とされたアゲートはそれからしばらくの間ひどいリンチを食らい続ける羽目になった。終いには猫眼がこいつの腹をカッ捌いて中身を引きずりだし一生流動食しか食えない身体にしてやろうなんて非常に危険な提案を投げかけてくる始末だ。もちろんこの提案に一番に食いついたのがドクターだ、人が変わった様に呼吸が荒々しくなり顔が熱を帯びて若干赤くなる。何やら久しぶりとか何とか呟いてメスを握っている。

まさか本当にここで内臓切除手術を披露するとは思っていないが、面白そうだったのでしばらくジンは静観することにした。

新聞の記事も面白い物が無く、つまんなくなつてまたゴミ箱に放り投げると新しいタバコに火を点けて、ポーっと自分の真上を眺めだした。こっちの事情も知らないでムカつくくらい真っ青に透き通った今日の空は晴天なり。こんな日は地元に行ったら魚なんかがよく釣れるのだろうが、生憎ここには釣竿も無いと来たもんだ。とにかく、予定が行き詰って非常に暇になったってしまったわけだ。

「暇だ・・・これからどうしたらいいもんだかなあ・・・」

時間を持て余しに持て余し続け、あっという間に数時間が経過してしまった。アゲートのリンチが終わった後、一行は仕方なく今夜のねぐらの確保を優先することとし、この街の宿屋を探して歩き回っている途中だった。籐のアゲートはと言えば・・・それはもう絵にも書けないほど酷い有り様になるまでボッコンボッコンにされ、半泣き状態で最後尾を歩いていた。

「なあドクター、一応僧侶なんだからさあ、医者なんだからさあ、オレっちの手当てしてくれないのさ？」

ドクターの服に縋りついて、治療を願った。その顔を見たドクターの顔は、はっきりとは見えないが明らかに嫌がっている顔をしているのは明々白白だった。あ、今軽く舌打ちしたのが聞こえた。

仕方なさそうにトランクの蓋を開けると、手を突っ込んで中から適当な石を数個掴んで取り出した。それは今までに何回かアゲートもお世話になった「薬石」だった。手に似ているだけで体の傷が少しだけ回復できる優れものだが、薬草と違って一度使った薬石は効果を失いただの天然石になってしまう。一応その天然石もそこそこ金になるのでそれ

を売ってある程度懐の足しにしているのもまた事実。

無言のまま眉間にしわを寄せて嫌そうにっ薬石を投げ渡すと、それを両手でしっかり受け取って傷を少しだけ回復させた。

「チッ・・・どうするんだいメガネ君。15万なんて金どうやって稼ぐ？」

「そこだよなあ・・・誰かさんのせいでこんなメンドクセー事になったんだでしょう・・・」

ジンの何気ない（というよりものすごく意図的な）一言に、全員の視線が今一度アゲートへ突き刺さった。その誰かさんは急いで後ろを向いて口笛を吹き、その場をごまかそうと必死になった。額にはバンダナにシミができる位凄い量の冷や汗が流れ落ちている。

しかしいつまでもこんなことを繰り返した所で金が転がり込むなんてワケが無い。一旦この話題は置いて、これから先いかにして必要な金額の金を稼ぐかを皆で考えることになった。

「やっぱここは日雇いの仕事でも探してアルバイトでもするか？」

「まア賢明な判断ネ」

核心を突く一番まとも且つ猫眼が言う通り賢明な判断は提案をジェットが言い出したが、それを頭からジンが否定した。

「冗談じゃないぜ。これ以上仕事するなんて真っ平御免だな」

「じゃあ何か画期的な方法でもあるのかい？」

否定した手前、こちらから何か提案しないといけないのでジンはしばらく頭をひねって案を練った。

提案1：野党襲撃。

町の外を歩いていると山賊なんかがあちこちでうろついているからそいつらを狩って有り金をいただいてしまえばいいけ

結果：却下（ドクター）

旅人を襲ったらとんでもないしっぺ返しを食らったという噂が流れ、特徴的だった「黒い服装の5人組」を意図的に避けている傾向がある。外を歩いても盗人連中と出くわす可能率はとても低い

提案2：いっそのこと強盗

町ん中を歩いている一般人の財布をできるだけ気付かれないようにする

結果：却下（猫眼）

いい年こいて前科者になんてなりたくないネ

提案2：その辺に転がっている死体から使えそうな内臓をちょろまかして・・・

却下：売らねえぞ×4

「そちらの方々・・・」

騒いでるうちに、どこからか声が聞こえた。振り向くと、5人の左後ろに40代くらいの男が木箱に座っていた。男は鼻の下にわずかな髭を蓄え、何かに対して確固たる自信を持っているかのようなギラギラした瞳でこちらを眺めていた。男から漂う気配は、只者ではない。

「・・・小生達に何か用かい？」

「あなた方意外が、ここにいる人間はいますか？」

言われてみればその通りだ。辺りを見回してみるとこの辺には人っこ一人見当たらなかった。しかし遠くで活気あふれる商人達の声や音が聞こえていることから察するに、いつの間にか裏道を歩いていたようだった。

「で、おっさんはアタシらになんか様なのか？」

「さっきから耳に響いていたんですが、どうやら金銭的なトラブルで困ってるようで？」

「だったら何ヨ？お前金貸しでもしてる慈善事業者カ？」

「そんな大層な人間じゃないですよ。どうですか、ここで一つ私とギャンブルでも？」

「下らねえよ。こっちとらただでさえ金欠なんだ、遊んでる暇は無い」

ジンが速攻でわけのわからない遊び人のオヤジの誘いを断ると、表通りへ戻るために方向転換して元来た道を歩き直した。他の4人もわき目を振ること無く踵を返してジンの後に続いた。

「私に勝つことができたなら、無条件で賭け金の10倍の金額をお支払いしようじゃないか」

男は5人の背中に向けてそう言い放った。思わず足が止まってしまうチラリと振り返ると、男は顎を手の上にのせてニヤニヤと笑いながらこちらを見ていた。

「そちらが負けても、賭け金をそのまま私が頂くだけだ。ノーリスクハイリターンって奴さ、如何かな？」

この男は明らかにジンを挑発し、自分との勝負に誘っている。怪しい瞳が光を反射し、より一層激しい輝きを放った。

「・・・下らねえって言ったはずだぜ、オッサ」

「オレっちが遊ぶさ～！！」

張り詰めた緊張感を全く気にすることなくその場の空気をブチ壊したのは、やっぱりアゲートだった。いつの間にか傷の治療が完了したアゲートが自分の財布から1000L分の金を取り出すとそのまま男の前に差し出してしまった。い

つにも増してぶっ飛んだ速さの行動力に、全員が脱力してしまった。

「オイコラそこのクソポケナス！！何考えてんだテメェ！？」

「バンダナ君・・・ひょっとしてまだ懲りてないのかい？」

「なんくるないさ～！もし勝ったこの1000Lが簡単に1万Lに変わるんだし、もし負けたってたったの1000Lだけさ」

いつにもまして悠長な発言に、いい加減全員が飽きてきた。だがその分周囲に与える怒りも半端ではない。

「上等じゃねえか・・・もし負けたら肩から腕丸ター本・・・いや、マグロの解体ショーだぞコラ？」

ジンが腰から一本剣を抜き、そっとアゲートの肩へあてがうとペチペチと刀身で頬を叩いた。その後ろではジェットが炎をチラつかせ、猫眼がボキボキと骨を鳴らし、ドクターがメスを数本握って待機している。失敗したら命の保証が無いとようやく悟ることができ、ダラダラと変な汗が溢れてきた。

「フフフ、Good。では早速、あなたとはこのルーレットで勝負しようじゃないですか」

男が唇を微かに釣り上げて微笑むと、木箱の隣に置かれていた大きな袋に手を差し込んだ。ゴミ袋か何かとしか思っていなかったその中には、彼の商売道具が詰まっているようだ。

しばらく袋の中を漁ると、中から直径15cmくらいの小さなルーレットが出てきた。赤と黒の交互に分かれた模様と1～40までバラバラに振り分けられた盤面、回すと中に入っている小さなベアリングの球が転がって一つの数字を目指して落ちるどこにでもある普通のルーレットだ。

「色でも数字でも、好きな方を選んでください」

「ようし、安全に『赤』のボックスに落ちるとみたさ！」

意気揚々と、アゲートは確率2／1の赤を選んだ。下手に数尾を選ぶより当たる確率の高い勝負を望んだわけだ。

男は表情一つ変えることなく、簡易テーブルを二人の間に設置してその上にルーレットを置いて準備した。

「赤ですね？それじゃあ私は・・・「黒の13」を選びましょう」

耳を疑った。この男、色か数字を選ぶどころか、「色と数字」を指定しやがった。こうなってしまうと成功する確率はぐんと下がって最低の40／1まで下がってしまう。この意外な賭けに、アゲートも顔を引きつらせた。

「へ・・・へへへ。おっさん、随分と度胸があるさねえ、負けたら1万だよ？」

「承知の上ですよ。こうやって今まで私は勝負してきたんですからねえ」

男は全く臆することも訂正することも無く、とうとうルーレットが勢いよく回転した。プラスチック製のおもちゃのルーレットがカラカラと音を立てながら回り、中のベアリングをあちこちに

跳ね返る様をアゲートは今日の前にあるゲームにワクワクしながら、男は自らの勝利を確信したかのように頬笑みながら黙って見守った。

しだいに回転が遅くなってくると、いよいよベアリングがこれから自分の入る穴を決めようと動き出した。お互いが手に汗を握る緊張の一瞬、バックサイドの4人も息をのむ。

とうとうベアリングが、これから入居する自分の部屋を決めた様に一つのボックスを選んだ。文字盤を2, 3回弾かれながら、最終的に『赤の28』へ向かって転がった。勝利を確信したアゲートは喜びから（賭けの勝利と生命の無事）ガッツポーズをとるが、直後に表情が明らかに喜びとは違うものに変化した。

あろうことかベアリングはボックスに入ったとたん、この部屋が気に入らないのか自らボックスから飛び出て隣のボックスへ吸い込まれる様に移住してしまったのだ。そして入ったボックスは、「黒の13」。この勝負、信じられないようだったが男の勝ちで終わった。

「うそおおん！！？？だって今間違いなく赤に入ったよね、見てたよね！？」

「間違いなく？何を言っているのですかねえ。いま弾が入っているのはそれこそ間違いなく私の指定した「黒の13」だ。よって、賭け金の1000Lは確かにいただきますよ」

男は目の前の現状を淡々と説明し終わると、アゲートの差し出した1000Lを無造作に掴んで背後に回した。しかし悔しがっている暇などない。この敗北は、アゲートの人生の終幕も意味している。

アゲートは己の背後から物凄い悪寒と殺気を感じ取り、カタカタと震えながら振り返れば、そこには3人の死神が待ち構えていた。

「ア〜ゲ〜エ〜ト〜・・・」

「わかってるだろうナお前・・・」

「キシシシシシシシ、オペを始めようじゃないか・・・麻醉は無いが」

全身から汗が噴き出し、錆びたブリキの人形のように体が動かなかった。とにかく何か言わなくては・・・そう頭で考えて、ようやく肺が呼吸を再開し一言だけ発することができた。

「・・・・・・・・ゴメ〜ンに☆（キラッ）」

少しでもごまかそうとこの言葉を選び、調子に乗って指を頭に当ててお茶らけながら首をかしげるが・・・・・・・・そんなことしたって相手を逆上しかしけないと言う事に気付いていればまだマシな方法で死んでいただろうに。哀れなり、アゲート・モルガナイト。

襟を掴まれ、少し離れたところまで引きづられてから死刑は開始された。全員無言で最初のリンチよりもはるかに殺意を込めてアゲートを血祭りに上げた。もう悲鳴も聞こえない程に徹底された処刑だった。男はあえて何も言う事無く、ただ眼を閉じて事の成り行きが終了することを待ち続けている。そしてジンはその男の様子を、なぜかじっと観察する様に見下していた。

「おーいジン、お前もこっち来いよ」

「君の剣でコイツの解体ショーの始まりだよ、キシシシシ」

「バラとミンチにして肉屋に安く売りつけるネ！」

「・・・・・・・・ちょっと待てやおっさん」

ジンはすでにモザイクがかからないと肉眼で直視できない有り様になっているアゲートを見捨て、男の元へ近づいた。

「何か用ですかな？」

「そのルーレット、ちょっとよこせや」

そう言うや否や、男の返答も待たないで置きっぱなしにされたルーレットを掴みとった。一体何をするのか興味深げに見ていると、何を考えているのかジンは自分の頭よりも高いところまでルーレットを放り投げると、目線の位置まで落ちてきたところで剣を居合切りの要領で素早く抜刀した。地面に落ちた時にはもう、ルーレットは金具もろとも真っ二つに切り裂かれてしまっていた。

ひどいことをする、人の大切な商売道具を」

男の反応はとても軽かった。まるで本当は大切になんかしていないおもちゃを壊されたかのように聞こえる声だ。

「大切な・・・ねえ。そいつはこのルーレットか？それともこっちの事か？」

ジンは割れたルーレットの片方、ベアリングが落ちた黒の13がある文字盤を拾い男の目の前に突き付けた。文字盤の、黒の13のボックスの裏にはジンの予想した通りの物が組み込まれていた。それは銀色の小さな物体で、テープで簡単に固定されている。そしてさっきから見ていると、文字盤は逆さまになっているのにベアリングはずっとボックスの中でくつろぎ続けているではないか。銀色の箱の正体は、磁石だったのだ。

「・・・フッ。どこで気が付いたので？」

「テメーが最初に指定した時からどうも怪しい気がしてたんだが・・・案の定やってくれるじゃねえかおっさん？金属のボール磁石で誘導してりゃよっぽどのが無い限り絶対ここに入るに決まってらあな」

怒りが込み上げ、自分でも憤りのコントロールができなくなってくると文字盤を放り捨てて、男の胸ぐらを掴み上げた。

「クソイカサマ野郎が、今の金返してもらおうじゃねえかコラ・・・」

ジンは自分でも久しぶりに声を荒らげて男に告げた。本当の所は別に激怒しているわけではなく、ワザと怒っているふりをしてこの男を脅しついでに金を巻き上げようと言うとても汚い魂胆が隠されているのだった。もちろん、数十倍の利子を付けてだ。

だが、男だって負けてはいなかった。

「クソイカサマとは心外な・・・こんな単純なクソイカサマすらも見抜くことのできなかったそのガキは何だと言うんだ小僧」

ジンの胸ぐらを掴む腕を掴み返し、男が立ち上がって啖呵を切り返してきた。表情が一変し、口調も急激に変わっている。

「いいか小僧、イカサマってのはな、ゲームの最中に見抜くことができなかつたらそれはイカサマじゃない。ただの「勝利のテクニック」の他ならない。私はこうやって25年もの間このギャンブル一つで生きてきた正真正銘のギャンブラーだ。ちょっと見抜くことができたからと言っていい気なるなよクソガキが！！」



言葉遣いに関してはジンの上をゆく啖呵だ。言葉の内容も重々しく確信を突いた言い分でもある。罵倒以外での口喧嘩が苦手な人の負けを自ら認め男から手を離れた。

この男、自らをギャンプラーなんて銘打っているが、正体はきっと凄腕のイカサマ師で違いない。25年間と言っているが、その間まで一体どのような手法で当ての心理を正確に突き、大金を巻き上げてきたのか計り知れない。

ジンは一度煙草の煙を口の中いっぱい吸い込み、一気に吐き出すことで頭の中を落ち着かせた。煙をわざと男の顔に吹きかけて喧嘩を売っても、全く微動だにしない。正面から殴り合っただけの喧嘩なら楽勝だが、そんなことでは気が治まらないし、第一このまま負けっぱなしというのが何より腹立たしいのが事実。

だったらこの喧嘩の仕方はもう決まった。

「上等じゃねえかおっさん、今度はオレが相手をしてもらおうじゃねえの」

コイツとゲームで勝負し、イカサマを正確に見抜いてその天狗鼻を根元から叩き折る。コイツのプライドをズタズタになるまで引き裂くにはこれしか無さそう。ジンは自分のポケットマネー、全財産が入った財布を取り出すと、それをテーブルの上にたたきつけた。

男もその勝負を待ってたかのようにほくそ笑むと、アゲートの時と同じように「Good」と呟き木箱の上に座り直した。

「やめとけジン。この野郎どうせまたイカサマするに決まってんだぞ」

「わかってるのかい？君の金が無くなったって小生たちは君に金は貸さないよ・・・キシキシ」

「お前の責任で貧乏なるは構わないが、私達にまで迷惑かけるようなら許さないネ！」

後ろでギャーギャー騒いでいる3人を余所に、ジンは上着のコートを脱いで本気モードに突入した。シケモクも吐き捨て、新しいタバコを加えて頭の中もリフレッシュさせる。

「そんなしだおっさん、勝負は3回戦だ。3つのゲームでオレと勝負してもらおうぞ」

「よろしいでしょう。では手始めに・・・」

男は目を細めて笑うと、おもむろに足元に落ちていた小石をつまんでジンの目の前へ差し出した。

「こんなゲームは如何かな？このただの石ころが、どっちの手の中に収まっているか・・・というのは？」

言うや否や、男は両腕を肩幅まで広げるとさっき拾った小石を目の前で左右にキャッチボールさせ始めた。もちろんただ投げているだけではない、目の前で飛び交う小石が二つや三つに見えてしまうほどの超スピードで繰り広げられる超高速キャッチボールなのだ。常人の目でこれを見抜くのは相当骨が折れることは間違いない。ジェットは目が追いつけず逆に目を回すし、猫眼の視力でもギリギリ見えるか微妙な所だ。

10秒ほどでキャッチボールが終了すると、両方の拳をそっとテーブルの上へ置いた。

「さあ、『究極の二択ゲーム』の始まりです。お好きな方を選びなさい」

男はわざと大げさにこのゲームを表現し、低い声でジンにプレッシャーをかける。だが精神力だったらジンだって負けてはいない、全く臆することなく悠々と煙を吐き出すと反対に軽い口調で答えてやった。

「左だ」

数秒の間、二人の視線がぶつかり合いながら長い沈黙が訪れた。先に顔をニヤけさせたのは・・・男だ。男は目を細め肩を揺らしながら笑っている。

「残念でした・・・」

手のひらを返し、量の拳を開くとさっきまでキャッチボールしていた小石は、ジンの様相を裏切って右の拳の中に収まっていた。

一回戦はどうもジンの負けで確定のようだ。後ろからも残念なため息が聞こえた。ジンも何も言う事が無い。

「フッフ・・・このゲームはお望みのイカサマは抜きでしたよ？では次の」

グシャアッ！！！！

「痛てええええええええ！！！！！！！！」

何もかもが突然過ぎた。全員が驚きを隠すことができずに今起こった目の前の現状にただひたすらにビックリしている。男が手を引いて次のゲームの準備をしようとした時だった。突然ジンが足を振り上げたかと思うと、あろうことか男の石を握っている右手を全力で踏み潰したのだ。見事に男の右手は粉碎し、指が2～3本へし折れて手の甲が裂け、血が噴き出している。

「がああ・・・小僧貴様何をする！？」

「粹がってんじゃねえぞコラ・・・今の勝負、間違いなくオレの勝ちじゃねえかタコが」

何を言い分にしてくるのかと思えば、そんなセリフに全員が驚愕した。それは男も同様である。

「何を根拠にそんな事をほざいているんだ貴様！！？」

「オレは『左』としか言ってねえじゃねえか？なのに、なんでかってにてめえの『左』をハズレにしてんだよ・・・『左』って言ったら、オレから見て『左』に決まってんだろ」

チンピラにも等しいとても荒い口調で言い放った。つまりジンが言いたいのは、「自分が選んだのは男にとっての『左』ではなく、自分から見ての『左』」ってことなのだ。だからこの勝負は自分の勝ち・・・そう言っている。

足が離れると男は右手を抑え、急いで布でまきつけて傷を固定した。残念なことに利き手の人差し指が砕けている、これでは普段通りのイカサマで勝負することは絶対不可能だろう。

怨念のこもった瞳でジンを睨むが、ジンは全く怯む様子すらないときた。どうにもジンはたとえ自分が「右」を選んでいてもこの方法で無理やり勝利を自分の物とし、あわよくば今の様にイカサマ封じのために右手を別の方法でぶっ壊していたことだろう。二択ゲームを選んだ時に思いついたイカサマに勝つための手段が、これだった。

男は悔しそうに歯を食いしばり、かなり痛む様で右手を抑えてたまま黙りこんでしまった。

「っく・・・いいだろう、一回戦はあなたの勝ちだ。だが次はこうはいかないぞ小僧・・・。この私のプライドにかけて、貴様を負かして見せてやる！」

額から流れる汗をぬぐい、無事だった左の手でジンを指差した。セリフに自信はあるが、表情はすでに切羽詰まった様子である。きつとこんな形で負けてしまうのは久しぶりか、あるいは初めてだったのだろう。反対にジンは勝利を一つ掴んだことで余裕ができ、顔も頭も至極落ち着いている。

「強がりには良くねえぞおっさん、もう後がねえってこと忘れてんじゃねえぞ。次勝ったらオレの金の倍額を頂くからな」

「倍額・・・？面倒くさい話はもうすべて無しにしようじゃないか小僧。『選ぶ』という行動の真の恐ろしさを教えてやる」

焦った様子を見せているが、男はまだ勝機を握っているような笑いを浮かべている。

男がさっきの小石を放り捨てると、両手を自分の背後へ回した。不審な行動に対し自然と経過して剣を握ろうと手が伸びたが、その必要はなくなった。

男が引きずり出したのは、ふたつの金属製のアタッシュケースだった。ドクターが荷物を入れているトランクより一回り大きいくらいのケースを、目の前にドンッと乱暴に叩きつけた。

「・・・ビックリ箱に興味はねえんだがな？」

ジンはここでもわざと挑発的な態度に乗って出た。しかし男だって伊達に修羅場をくくってきているわけではない、いつの間にか汗がひき表情が初めてであった時と同じような冷徹な顔つきに戻っている。この切り替えの速さもギャンブラーの能力なのか知らないが、なかなかの精神力の持ち主であると再認識した。

「私は今回、実に7年ぶりに賭けで負けました。この感覚もとても懐かしく感じるくらいだ」

「テメエの昔話なんぞ知ったこっちゃねえんだよ。次は何して遊んでくれるんだ？」

「よろしい・・・このゲームはどこのどんなゲームよりも単純で、それでいて究極のゲームであると私は思っている。簡単に言えば「二者択一ゲーム」ですよ」

どうも次のゲームの内容はさっきの小石のキャッチボールと同じに見えた。しかしさっきと違うのはすでに選ぶ隊商であろうケースが既に目の前に用意されていることだ。小石のキャッチボールなら目で追う事も出来たかもしれないが、あらかじめ用意されたのであれば答えを見ることはできない。

「もしあなたが勝つことができれば、このケースに仕舞ってある25年間蓄え続けてきた私の楽しい老後を支えるための金、合計2000万Lをくれてやろう」

男の大胆な発言に皆が目玉を飛び出させて驚いた。何せ国王から貰った金よりも数倍の金額をゆく2000万Lが、この二つのケースの中に入っていると言うのだから。しかもその金を惜しみも無く、勝てば全額ジンの物となる。一攫千金とはよく言ったものだが、この言葉を地で体感するのはさすがにこれが初めてだ。

「随分と豪快なこと言ってくれるじゃねえか。2000万なんて大金がその箱の中に入っているとはとても思えねえんだがな、オレは」

「ウソではない。私はせくせく働くのと面倒くさい人間関係という奴が嫌いで、いつの間にかこのような方法で金を稼ぐことを覚えたんですよ。いつの間にかギャンブルその物が好きになりその金で豪遊する趣味も無い、最低限の生活費とさっき言った私の安定した老後を過ごすための金しか集めてないんですよ」

豪快な賭けをしてきている割に、金の使い道がかなり地味だったが男の目はいつになく真剣その

ものだった。そこまで断言するのならこちらだってやぶさかではない、この二つの箱の内の片方にだけ、本当に2000万Lが眠っていると確信した。

「上等じゃねえかおっさん、イカサマ抜きタイマンでこの俺とガチンコ勝負ってわけだ？」

「個人的に久々に燃えてきただけだよ。真剣勝負という奴がしたくなっただけさ」

二人の視線が空中で交わると、互いにニヤリと笑った。両者とも勝利を信じている不敵の笑みだ。

そんな時だ、ジンがいきなり妙な質問を賭けてきた。

「なあおっさん、今の掛け金に上乗せって出来るのかい？」

「できますが、一体何を上乗せで賭けるので？もうあなたの金は無いのではないのでは？」

「その通り・・・だからよ」

ジンはその場からちょっと席を外すと、気絶しているアゲートのすぐそばに転がっていた一斗缶を持ち出し椅子の代わりにして座った。同時に、足をテーブルの上にたたきつけるように振り下ろして行儀悪く両足を組んだ。

そこでジンが発した一言が、これだ。

「賭けるのは・・・オレの命でどうだ？」

男ですら予想の出来なかった一言に、片眉を吊り上げ、後ろの女二人は驚愕し、ドクターは腹を抱えて笑いだし、アゲートはまだ夢の世界を彷徨っている。

「最っ強のアホかお前は！？自分で何言ってんのか解ってんのかコラ！！」

「ちょっと金をかけただけの遊びに、バカみたいに本気出してなに賭けてるかお前ハ！！？」

外野が必死になって今の発言を撤回しようとしたが、ジンは絶対にこの発言を撤回するつもりはないようでほとんど無視しながら話を続けた。

「服から武器まではもちろん、肉も内臓も髪の毛一本まで残らず全部賭けてやんよ。負けたら素直にバラされてやるし、専門業者に正しく売り渡せば人間一人で相当な金ができるんじゃないか？」

「・・・V e l i   G o o d !! その賭け金、認めましょう」

男の方も、後ろでうるさくギャーギャー騒いでいる女どもを聞き流し、賭けを認めてしまった。という事は、もうジンは後戻りすることはできなくなってしまった訳だ。まさか金が欲しかっただけのゲームで、こんな形で命をカンタンに賭けるような事態になるとはだれも予想することなんかできなかったらう。

「さあ本題に戻ろう、2000万が入ったケースは……一体どちらでしょうか!？」

いよいよラストバトルの火ぶたが切って落とされた。

男は悠々と腕を組み、背後の壁にもたれてジンの回答を待っている。ジンは吸い尽くしたタバコを吐き捨て新しいタバコに火をつけて集中し直した。

黙ったまま、じっと左右に並んだトランクを交互に見やりながら答えを探る。

「言っておきますが……さっきみたいに口先だけで『左』なんて選ぶなよ。正解だと思う方のトランクを触れ」

「わーってるっつーの、タコ」

やっぱりさっきの手はもう使わせないように釘を刺されてしまい、ちょっとがっかりした。思わず舌打ちをしてしまい、今度こそ真剣に品定めを始めた。

それからしばらくの間、ジンは手持無沙汰気味にライターの蓋をカチャカチャ開けたり閉めたりしながら左右を見比べている。右かと思えば左が怪しいと思えるし、左が正解かと思えば右が臭く感じる……。二者択一、これを男は『究極の二択ゲーム』と表現していたが、やはり悔っていた。二者択一とはこの緊張感がとても怖いのだと実感していると額から嫌な汗が流れてくる。一步間違えればその瞬間にジンの命が終了してしまうんだ、慎重に選びたいが逆に慎重になりすぎ無駄に迷って集中力が散漫になっていってしまう。

「……念のために聞きたいんだがよう、こん中には間違いなく、100%、2000万Lが入ってるんだな？」

「……100%です」

今さらな質問を平然と返答してやった。それからまたしばらくトランクを見比べ、吸い終わってしまったシケモクを吐き捨てた。

「ラチがあかねえな……なあ、お前らだったらどうする？」

突然ジンのたらだを180度回転させ、後ろで立っていた3人に相談を持ちかけてきた。いきなり聞かれたもんだから少しビックリした。男も何も言ってこないから外野と相談することはできる様なので3人は軽く頭を働かせて考えてみた。

「アタシだったら……左、かな？根拠はねえけどよ」

「小生なら右」

「ドクターが右なら私も右ヨ」

答えが出そろった。結果は右が2で左が1、答えが右に偏った。

煙を吐きながらもう一度視線をケースへ戻すと、それからもうしばらくの間左右に視線を泳がせながら再び考えだす。

「どうですか、お仲間の意見で答えは決まったのかな？」

「・・・・・・・・決めた」

ジンのアンサーがようやく出来上がった。もしも正解することができれば2000万L、ミスすればその場でオダブツ確定の運命の分かれ道ってヤツに立ったのだ。

タバコの煙を肺の中いっぱい吸い込み、煙と同時に答えを言い放った。

「……どっちでもねえ」

「……は？」

「聞こえなかったか？オレはな、どっちでもねえって言ったんだよ」

周囲の空気が一瞬停止したような感覚だった。ジンは今、左右どちらかのケースを選ぶゲームのさなか、あえて「どちらも選ばない」という第3の選択を選んでそう告げたのだ。

もちろんこのような冒険に男は耐えることを知らない。

「この私をバカにしているのかクソガキが！！自分の命がかかっていると言う事を、忘れていいのか！！？」

「忘れるわけねえだろボケ。俺だって命ぐらい惜しいわな」

突拍子の無いことを宣言しておきながら、ジンは全く動じている様子は無い。まっすぐと睨みつける視線には絶対の自信が漲っている。

それどころか、男の様子が逆におかしくなっている。やけに慌てて明らかに取り乱していた。

「命が惜しいのなら、なぜ選ばない！！」

「このケースはトラップだ。だから本当の答えは……」

男が不自然に目を反らすと、ジンは立ち上がって腰に下げている剣を一本抜いた。その剣をどうするのか一同が見守っていると、突然剣先を男の方へ向け突き放し、足元を数かして座っていた木箱へ命中させた。

「こっちが、当たりだろ？」

腰を抜かして地面に落ちた男を眼鏡の奥からキラキラと光る眼で睨みつけながら言った。男はジンの強烈な威圧感に押し負け、身体を引きずりながらガクガクと震えている。

「……ジャッジメントの時間だ」

不意にジンはテーブルの上に、壊れてしまいそうなほどの勢いで片足を叩きつけた。ドカンッ！と大きな音が響くと男の身体が一瞬ビクンと跳ね上がった。

「白黒はっきり決めようじゃねえかギャンブラーのおっさんよう！オレが当たったのか、それと

も外れたのか、どっちなんだ！！ええ！？」

ジンはここぞとばかりにドスの利いた激しく大きな声で男へ詰めより始めた。男は背を壁に貼り付け、恐怖からなのか汗を流しながら全身をガタガタ震わせている。

「そ、それは！・・・・・・・・えっと、その・・・・・・・・！！？」

男の反応を見せられれば、真偽は一目瞭然だが、それでもジンは男を脅すことをやめなかった。その姿は宗教画的に言えば人間に迫る悪魔、現実的に表現すれば借金を請求する金融会社の取立人と借用人の様な光景である。

しばらく口を魚のようにパクパクさせていると、突然男は白目を剥き泡を吹いた後に、地面に頭からぶっ倒れて失神してしました。オマケに泡の奥では小さな声で「ばれた」とか「老後が」とかうわ言を呟いている。

この勝負、ジンの完全勝利だ。

「スッゲー・・・」

この戦いの感想を述べるなら、まさに今ジェットが言ったので正しいだろう。

ジンはテーブルから足を下ろして缶に座り直して勝利の一杯を楽しみ、ドクターと猫眼は倒れた男を突っついたり顔に落書きしたり遊んでいる。

ジェットが恐る恐るケースを確認するために右から蓋をあけると、中身は空っぽだった。反対に左のケースも開けてみると・・・ジンの読んでいた通り、中身はこちらも空だった。

「ジン、オメエは本当にすげー奴だな。何で両方ともハズレだって解ったんだ？」

このゲームの結果で最も謎だった質問をジンにぶつけると、煙と一緒に帰ってきた答えはこうだ。

「なんとなく・・・。つーかお前らが左右どっちか聞いた時にはもう木箱って選んでたし」

「・・・どういう意味だいメガネ君？」

「オレ天邪鬼だからな、他の奴らと同じ答えなんて嫌だっただけだよ」

あまりにも酷すぎる、しかしジンらしい答えだった。

感をけっ飛ばしながら立ち上がり突き刺さったままの剣を握り、木箱の蓋に突き刺してパールの様に木箱をこじ開けた。その中には、本当に2000万Lは入っているのではないかと疑いそうになるくらいの小銭や紙幣がぎっしりと詰め込まれている。

「しかし本当に木箱で正解だったとはな、儲け儲け」

木箱の中身を空っぽのケースの中へ流し込んで蓋をすると、ジンはそのまま担いでひょうひょうと歩き去ってしまった。

まさかそんな理由で自分の命さえかけて出した答えだと思うと、3人はしばらく白くなった後に激しい怒りが込み上げてきた。

「さてと。懐も速攻であったまったし、さっさと船の手続きするぞ」

「待てやこの無責任の糞ボケ野郎！！人のことどんだけ心配させれば気が済むんじゃワレァ！！」

この後、背後から襲ってくる複数の攻撃を華麗に捌き、なおかつ返り討ちにしながら表通りへ一行は出て行った。

さっきジンは自分が天邪鬼だからと言っていいが、実の所を言えば金がトランクに入っていないことをあらかじめ知っていた。

なぜそんな事を知ることができたのか、その理由はアゲートが最初にルーレットで負けた時にあった。あの時掛け金の10001をしまう時に、男は金を自分の後ろに回していた。もしも本当に2000万Lがトランクの中にあらかじめ入っていたのなら、あの金だってトランクの中に仕舞うのが常套だろう。だが男の背後ではこのトランクを開ける仕草も無く、それどころか大金をしまっている音の一つも全く聞こえなかった。別に関係の無いどうでもいいようなことに耳が傾いていたにしては、この情報が役に立ってくれたことに感謝せねばなるまい。

だとしたら、あの金はどこへ消えたのだろうか？男は腰にポーチも巻いてないし、ポケットに入れてないとすれば最後に残るのは椅子の代わりに使っていたあの木箱しかない。たぶんどこかに穴か何かがあるんだろう、そこから手に入れた金を入れて保管していたのだ。

自慢のイカサマも器用な指が使えないとなると後はハッターとウソしか勝負する手立ては無い。ゲーム中に気付かないフリをして、ワザと迷っているように振る舞うために連中に意見も聞いて、最終的に相手を限界まで脅して木箱を選んだらこの通りだ。まあ男が泡吹いてぶっ倒れるまでは予想していなかったが、それこそ別に関係など無い。

兎にも角にも数分後、一行がもう一度船着き場の窓口まで戻ってシーバルー行きの船の予約を頼もうとした矢先、こんな所でまた新たなトラブルが発生してしまった。

「船がもう出て行っただあ!？」

「はい、ほんのちょっと前に、もう」

昼間はここでアゲートが叫んでいたが、今度はジェットが叫ぶ番だった。同様に最初来た時にはいなかった違う係員が静かにシーバルー息の船の現状について静かに説明してくれている。

ジェットが叫んだように、船は15分前に出港済みで、次のシーバルー行きの船の到着は3日後とハッキリ言われた。

すると、それを聞かされた全員の身体が砂になり、まさに砂上の城が如くその場で崩れ落ちた（イメージです）。せっかくあれだけ苦労して金の準備が速攻で出来上がったと言うのに、直後にこの始末だ。金があるのに船が無い、しかも次の船は3日後、その間3日もこの街で強制的に足止め、やりきれない気持ちになるのは当然だろう。

「・・・砂に還ってしまうのはそちら側の自由ですが、次シーバルー行きの船の予約なら一応できますよ？」

困り果てた係員のとっさの一言に、4人の身体が一瞬で実体化して元の姿に戻った（だから気持ち的なイメージだってば）。

どちらにしろココで3日間滞在しなくてはならないことに変わりはないが、何もしないでここでボーっと時間が経つのを待つよりはマシだ。

早速ジェットが渡された書類に代表でサインそし、シーバルー行きの一番安いプランでチケットをとった。

「ほい完成、ほんじゃ頼むぜよ」

「ハイハイ毎度・・・あれ、これ人数が5人になってますが？」

「おう、5人だけど」

「自分の目がおかしくなったのでしょうか、お仲間の数を何度数えても4人の様な気がしてならないのですが・・・？」

・・・なんのこっちゃ？振り返って指差し確認でメンバーを数え直してみる。ジンだろ、アタシだろ、ドクターだろ、猫眼だろ、ほら5人。

・・・じゃねえ。

あのアホがいない。

そのころ、今回の話の中心に立ち続けていた例のアホはと言えば。泡を吹いて未だ失神している男の傍で体がボコボコのまま放置されてぶっ倒れていた。

．．．．．いや違う。微かに聞こえる呼吸のリズムをよく聞くと、このアホは寝ていた。数時間後、まさか自分が仲間の手によってあの世の数センチ手前まで運ばれることになるとは知らずに、スヤスヤと．．．．．

## おまけ

---

名前 古 虎眼 (クー フウメイ)

年齢／性別 25／♂

誕生日 11月4日 (蠍座)

誕生石 シトリン (友愛と希望)

レベル 59

性格 堅物石頭 厳格

職業 舞闘家

装備品 ナックルダスター 黒い戦衣

好物 辛い物 修行 戦 安眠

嫌物 優柔不断 墮落

眼／髪 銅、ツリ切れ目／黒、一本結び

身体的特徴 眠るたびにもう一人の自分 (猫眼) と入れ替わる

イメージカラー 黄

楽器 チェロ

備考 闘いを何より好む戦バカ、故に常に更なる強さを求める

物事の問題を理論より力で解決しようとする癖がある

希望CV 石川英朗 森川智之 諏訪部順一 羽多野渉

## おまけ2 (同一人物ということで)

---

名前 古 猫眼 (クー マオメイ)

年齢／性別 25／♀

誕生日 11月4日 (蠍座)

誕生石 シトリン (同上)

レベル 59

性格 本能に忠実で、何も深く考えない

職業 舞闘家

装備品 仕込み靴 (鉄板入り) 黒い戦衣

好物 麺料理 睡眠 ドクター

嫌物 難しいと思った物全て イモムシ

眼／髪 銅、猫目／黒、一本縛り

身体的特徴 眠るたびにもう一人の自分 (虎眼) と入れ替わる

イメージカラー ピンク

楽器 オルガン

備考 虎眼とは同一人物扱いされ、記憶や感覚を共有

ドクターとは後に恋人同士に

希望CV 久川綾 甲斐田裕子